

生化学項目（酵素成分）における項目間比チェックを用いた再検基準の検討

◎大倉 一晃¹⁾、長部 真帆¹⁾、石田 美雪¹⁾
新潟勤労者医療協会 下越病院¹⁾

〔目的〕内部精度管理手法の個別データ管理(リアルタイム精度管理)として項目間比チェックがある。今回、生化学項目(酵素成分)の項目間比チェックを日常検査に導入するに際して、その許容限界を算出し、再検基準を設定することを目的とした。

〔方法〕2021年3月～8月の全科においてAST/ALT、 γ GT/ALP、LD/ASTに関して、各項目が基準値範囲内外(全例)、基準値範囲内、基準値範囲外の3パターンで相関係数、平均値、標準偏差(SD)、許容限界値(平均値 \pm 2SD)を算出し、結果に差があるか確認した。なお、ALPとLDはIFCC法にて測定した。

〔結果〕各項目間比について(例数、相関係数、平均値、SD、許容限界)の順に、AST/ALT について全例は(25803、0.86、1.40、0.99、-0.58~3.38)、基準値範囲内は(17886、0.53、1.41、0.53、0.35~2.47)、基準値範囲外は(7917、0.86、1.38、1.61、-1.84~4.60)となった。 γ GT/ALP について全例は(14375、0.54、0.57、0.81、-1.05~2.19)、基準値範囲内は(9690、0.11、0.35、0.19、-0.03~0.73)、基準値範囲外は

(4685、0.47、1.04、1.28、-1.52~3.60)となった。LD/AST について全例は(11984、0.88、8.78、4.30、0.18~17.38)、基準値範囲内は(6641、0.28、9.42、2.37、4.68~14.16)、基準値範囲外は(5343、0.88、7.99、5.77、-3.55~19.53)となった。

〔まとめ〕今回項目間比チェックの再検基準を設定するにあたり、基準値範囲内外で許容限界値などに差がみられるかを確認した。各項目間比全ての3パターンで相関係数、平均値、SDに差が見られた。現検査システムの再検設定では基準値範囲内外のそれぞれの設定ができないため、各項目間比全て全例の許容限界値を再検基準として設定した。なお、許容限界値が「0未満」の値に関しては下限値を「0」とした。今後、項目間比チェックの許容限界値外に該当する例数の確認や再検率の評価等を行なっていきたい。(下越病院検査課-0250-22-4711)